

巻頭言

人の心がセキュリティの原点

公益社団法人 日本防犯設備協会
NEC プラットフォームズ株式会社

常任理事
執行役員 近藤 秀一



猛暑の夏も終わり、朝晩めっきり涼しくなり爽秋の頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

温暖化の影響もあり、毎年災害が絶えない状況が続いている、今夏も令和2年7月豪雨等で大きな被害にあわれた皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

COVID-19の影響で私たちの日常は大きく変化しました。9月23日には世界全体で感染者数3,163万人を超え、国内でも7.9万人と多くの感染者が出て予断を許さない状況が続いています。ご自身やご家族の安全・安心を最優先に、COVID-19に感染しないよう、日ごろから気を付けていくことが日常となりましたが、万が一罹患したときの対応が、識別、防御、検知、対応、復旧のように、企業のセキュリティインシデントの対応に近似していることを改めて強く感じました。弊社では、IT製品をマーケットに送り出しているメーカーとして、情報セキュリティリスク対策(CSIRT)と、製品セキュリティ対策(PSIRT)でセキュア開発、セキュア生産に取り組んでおり、“セキュリティをブランドに”を合言葉にして活動を進めております。

さて、新しい日常を感じている折角の機会なので、小難しいセキュリティではなく、時代ごとのセキュリティについて、カジュアルに触れたいと思います。

この世に生を享け、思い出深き多感な時期を過ごした「昭和」。

戦後の復興から経済成長著しく、街の近代化、技術の高度化、交通インフラの高度化を通じ利便性の飛躍的向上を実感してまいりました。特に衛星通信によるTV中継、人類が月に着地したドラマもあり、今までの生活を一変させる技術革新は当時のNEW_NORMALなモノがありました。「昭和」の晩年は携帯電話の普及とともにバブルの好景気に沸き、まさに激動の時代であったと記憶しています。その反面、寂しさもあり、埃っぽい未舗装の道や空き地など、冒険心を育む子供の遊び場も少しずつ埃っぽい独特な匂いとともに消えていった時代でもありました。情報技術といえばほとんどがアナログ方式で、セキュリティがとても脆弱でしたが、社会的にも守るべきものの認知度も低く、いま思えば日常生活の中では怖さを感じずに過ごしていたように思います。

そして、社会人として多くの時間を過ごした「平成」。

景気の起伏の実感が薄く永続的な不景気にさえも感じられるほど平たく感じましたが、セキュリティ面から言えば、脅威と安全の社会的認知度が高まり、脅威と安全のいたちごっこと言われた時代がありました。情報通信社会ではデジタル化が進み、1人1台のパソコンから携帯電話、そしてスマートフォンへと、利便性が劇的な高まりをみせ、特に交通系ICカード全国相互利用サービスの実現には、技術と業界の融合というのに大いに驚かされました。「平成」の晩年は情報漏洩のニュースも多く見受けられ、情報セキュリティにおいては、社会的重要性、企業努力ではなく社会的義務として確立された時代となりました。

そして未来へ続く「令和」。

とはいっても始まったばかりで、軽々しく語ることも憚れるので、時を皆さんに产まれるだいぶ前の「江戸」に戻してみましょう。以前、落語好きの友人から、「落語には泥棒が出てくる嘶が多く、江戸の暮らしにはセキュリティについても多く触れられている」と聞いたことがあり、調べてみると、江戸時代の長屋の防犯設備は、昼の「コミュニティ」、夜の「木戸」といわれているようで、連帯責任が強い時代背景から、昼に長屋に残っている連中が不審者を発見し、夜は木戸を締めて通行規制(セキュリティ)していたようです。

江戸から令和、いつの時代も酒場で耳をすませば、様々な秘密情報が多く飛び交っています。

セキュリティの原点は、「壁に耳あり障子に目あり」といわれていますが、国内外問わず、酒場での情報交換は古の時代から変わらないセキュリティホールかもしれません。

秘密は心に留めておくのが一番、なくさないようお酒で飲みこんでしまうことも一策かもしれませんね。

あとがき

古来、改元は凶事をリセットするために行う意味があるようですが、幾多の困難な時代を乗り越えてきたことを考えれば、「令和」の時代は凶事を好機に変えることが出来る柔軟な社会に向かうことができる様に、弊社も微力ながらデジタル化やDX(デジタルトランスフォーメーション)の加速で安心安全なSafer CitiesとSDGsに貢献してまいりたいと存じます。